

チベット佛典について

山口 益

ここに「チベット佛典」というのは、東北大学のチベット佛典についての刊行物に、チベット大藏經総目録（昭和九年刊行）と、チベット撰述佛典目録（昭和二八年刊行）という二つの目録があることによって了解せられる如く、チベット佛典といっても、チベット大藏經と、大藏經という叢書に収まらない佛典・藏外佛典とがある。ところで、わたくしが従来若干の関心を注いでいるのは、主としてチベット大藏經であるので、只今は、チベット大藏經について述べたい。

（一） 原典としての大藏經と翻訳佛典としての大藏經

さて、佛典の歴史的根源的な意味においての原典としては、一般的には、①南方佛教圏内の国々で、その聖典として伝承しているパーリ（Pali）語佛典と、②サンスクリット（sanskrit）語佛典ということになるのであって、その①パーリ語佛典は、高楠順次郎先生監修の下に国訳刊行せられた南伝大藏經六五卷によって知られる如く、大藏經として、まとまった形を整えて伝承せられているが、②のサンスクリット語佛典は、山田竜城著「梵語佛典の諸文献」

(平樂寺書店、一九五九年)の初めに述べられている如く、サンスクリット語佛典が現在、われわれに与えられるようになったについて、歴史的地理的に諸種の事情を経過しているために、サンスクリット語佛典は大藏經としてまとまった体裁をとるに至っていない、ということである。

次に、翻訳された佛典としての大藏經ということになると、①われわれに最も親しく知られている漢訳大藏經(大正新脩大藏經のような)と、②それから今日述べようとするチベット語訳大藏經との他に、③一三世紀に蒙古のジンギス・カーン(成吉思汗 Genghis Khan)の孫フビライ(忽必烈 Kubilai)の勅令を以って大成せられることになった蒙古語訳大藏經、④一七世紀に至って満州族の清国によって自国語に訳された満州語訳大藏經、⑤及び宋¹⁾・遼・金・元などと鼎立して約二〇〇年間続いた西夏が、シナとチベットとの文明を輸入して西夏文字を造り、西夏語大藏經の刊行という大事業を残したことで知られている西夏語訳大藏經というものなどを数え上げることができる。

それらの中で、チベット大藏經というものには、サンスクリット語佛典からの翻訳のされ方が最も直訳的であるという点が注意せられる。それは、サンスクリット語佛典がチベットに翻訳せられるに当って、サンスクリット語佛典が透写できるような構成をもつ古典チベット語(Classical Tibetan)が制定せられ、その古典チベット語でもって、主としてサンスクリット語佛典が翻訳せられていったという点で、チベット大藏經なるものは、その他の諸訳語の大藏經というものより、最も原典的である、ということになる。

本日は、そういうチベット大藏經について若干駄弁を費やそうとおもうのである。

(二) チベット大藏經編纂に至るまでの沿革

(a) 漢訳佛典伝訳事情

われわれに最も親しい漢訳大藏経は、後漢の桓帝の初め（紀元一四七年）に安世高パルチャという安息国の人の手によって訳せられたものを初めとし、爾後数百年間その訳経事業は打ち続いて、唐の開元一八年（紀元七三〇年）に智昇が開元釈教録という訳経目録を編纂した頃は、中国佛教史上、翻訳事業の最盛時を過ぎた頃で、その訳経目録に記載せられている佛典は、一〇七六部 五〇四八卷という数に上っている。それらの訳経事業を完遂せしめた数多くのインド佛教の使節たちは、ヒンドゥクツシュの險阻を越え、西域の大砂漠を跋涉して、所謂シルク・ロードを経由したか、或いは、第三世紀の初め以降、貿易風の科学的証明によって開発せられた南海の航路を経たのであったが、それらの使節たちは、涅槃寂滅を体現した佛陀釈迦牟尼に対する共通な尊崇の念から、インドとシナとを接合するために挺身し、数世紀間、途絶えることのない功業を成しとげた。つまり、それらの事業は、政治的な関わりとは離れた、純粹に個人的な宗教的信念に基づいて果されていった平和的な使節のいとなみというべきものであった。佛教が中国へ伝播していったそれらの事情の精神的な姿勢については、シルヴァン・レヴィ(2)著「佛教人文主義」、及び「インド文化史」に要を得た叙述が与えられている。

そのシルヴァン・レヴィ教授の叙述は、インドからシナへ向って佛教を伝訳した人々を中心にして叙述せられているが、そこに、七世紀の玄奘や義浄によって代表せられる中国人求法僧たちによってなしとげられた訳経事業も、同じ意味をもつものであることは固よりである。

(b) チベット語訳佛典伝訳事情

チベットの佛教受容。しかしチベット語訳佛典ができ上っていった過程は、それとはそのあり方を異にする。一体、佛教がチベットへ容れられたのは七世紀の初め、時のチベット王ソンツェンガムポ (Sron btsan sgam po) が、チベット高原の谷間に散在していた尚半ば未開の諸部族を王の權威の下に統整し、シナ及びネパールの帝王に向って

夫々の彼等の王女をチベット王妃として贈ることを強請したことから始まる。シナの唐の太宗の王女文成公主は、貞観一五年（六四一年）に、ネパールの王女バーモキツン（Bal mo khi bstun）は、それ以前にソンツェンガムポの王妃としてチベットに入っていた。二人の王妃は、共に熱心な佛教信者であって、何れも僧侶、佛典、佛像を携えてチベットに入って行った。これは佛教が公式にチベットへ受容せられたということである。それによって、佛教による文化事業が、中央アジアの砂漠よりも、より粗野なチベット地区で行われることになった。⁽³⁾

チベットにおける佛典翻訳の開始。けれども、佛典の翻訳が行われることになったのは、それより約一世紀半ほど後であって、チソンデツェン（Khri sron lde btsan, 754～794）王が訳経事業を開始した。すなわち、その王の晩年に近い七七九年に、サムエ（Bsam yas）寺が勅命によって建設せられ、それを訳経の場として、それより以後に訳経事業は開始された。その王の子チデソンツェン（Khri lde sron bstan, 798～815）によって、その事業は承継され、その子レーパチェン（Ral pa can, 815～841）に至って、事業は最高潮に達した。そのチデソンツェン王の晩年、八二年頃、勅命によって編纂されたとおもわれるデンカル⁽⁴⁾（Ldan dkar ma）目録によると、そこに記録されている佛典は七三〇余部に互っている。それらの佛典の翻訳者の中には、インド、カシュミール、ネパールからきた外国僧七名、チベット僧八名などの名が主なものとして注意せられる。

レンダルマの破佛。ただし、レーパチェン王は、余りに佛教保護に熱心であったために、国粋主義者のボン（Bon）教徒たちから嫉視されて殺逆され、次に即位したレンダルマ⁽⁵⁾（Glan dar ma, 836～846）王は、八四三年に破佛に暴威を振ったので、ペーギドジエ（Dpal gyi rdo rje）なる佛教僧の手で暗殺せられた。そしてレンダルマ王の変死によって、チベットの王統は絶え、それでチベットの古代史は終って以後は群雄割拠の中世時代となった。

そのレンダルマ王の破佛までに、現代のチベット大蔵経と称せられる佛典の密教以外のもので、普通 Buddhist Canon といわれる経はすでに八〇%、Exegesis といわれる論釈は四〇%がすでに翻訳せられてあった。

チベット佛教の復興。　　レンダルマ王の死後、チベット国内には群雄割拠の分裂状態が長く続いた。そしてレンダルマ王の破佛以後、諸侯たちが佛教の回復に努力したにもかかわらず、その回復は捗々しくなかった。インドやネパールからの学僧の入国する者も少なく、旁々佛教もボン教の思想に侵犯されて、怪しげな原始宗教に転落する傾向を辿った。そこで、こういう邪道を厭って再びインドから純粋な佛教を導入しようという動きが諸所に起った。恰もその頃、インドは回教軍の侵入に荒らされて、ナランダ (Nalanda)、ヴィクラマシーラ (Vikramasīla) などの大僧院は破壊され、文庫は焼かれ、僧徒は殺戮されて分散の余儀ない状態になったので、インド佛僧のチベットへの逃避が屢々見られ、それがチベット佛教の復興をうながした。⁽⁶⁾

その佛教復興の初期に、大訳官・リンチェンサンポ (Lo chen Rin chen bzang po, 950~1055) というチベット人訳経者も、可成りな部数の佛典を訳出しているが、インドのヴィクラマシーラ大僧院から迎えられた有名な学僧は、アティーンシャ (Atiśa; 梵名 Dīpankarasīrjāna, 980~1052) であった。彼は、佛教復興のためにチベットからヴィクラマシーラ僧院へ派遣されていた二人のチベット人学僧と共に、チベットへ入国する以前に、すでに相当数の佛典を訳出していたが、彼がチベットに入った六七歳から七三歳で逝去する迄に、到る処で講述し翻訳を行なった典籍の数は、まことに多部数に及ぶ。殊にインド大乘佛教の根幹をなす典籍に関するものが多部数に上っている。⁽⁷⁾彼の功業によって、純正なインド佛教の気風が振興し、チベット佛教は、彼に至って完全に思想上の統整がなされたといわれる。

アティーンシャ独自の教団は、カーダムパ (Bkrah gdams pa) と称せられ、その後継者によって、サキャパ (Sa kya pa) などの教団が成立している。それらの教団には、それぞれの保護侯国があつて、教権の拡大は結局、政治的支配圏内の拡張であり、チベットにおける政教一致の佛教王国という伝統は、その辺から抬頭していったと見られる。それら各派教団間には激烈な戦争を行なったということもあつたのであるが、一三世紀になって蒙古のフビライ・カイ

ンの時代（一二四七年）に、チベットが蒙古によって制圧せられたとき、アティーシャの系統であるサキャパの僧侶
パクパ（*Hphags pa* 八思巴）が認められて、フビライ・カーンの帝師（一二七〇年）となり、蒙古帝国の佛教の総
監督の役目をなし、蒙古新字を作成することになり、やがて、始めに一言した蒙古語訳大蔵經として後に集大成され
るべき蒙古語訳佛典の翻訳事業が起ることになったのである。

そのような事情からして、シルヴァン・レヴィ教授は、先に一言したように、インドの佛教がシルク・ロードを経
由し、或いは南海を経て中国へ伝訳せられたという功業を、ヒューマニズム・ブディク（*Humanisme bouddique*）
の重要な一面として取り上げると共に、インドの佛教が、チベットへ輸入せられ、特に回教軍によってインド本国に
おいて佛教が破滅せられる頃から続々とチベットへ取り入れられて、チベット佛典の翻訳ができて行き、チベット佛
教の教団が形成せられ、その流れの中で蒙古語訳大蔵經が翻訳せられるようになった事情をも、ヒューマニズム・ブ
ディクの著目すべき一面として認めようとするのである。

チベット大蔵經の編纂。さて、そのような事情を経て、一四世紀に、ブトン佛教史の著者として有名な学僧ブト
ン・リンチェンルプバ（*Bu ston Rin den grub pa*, 1290-1364）の時に至って、現在のチベット大蔵經の源の形と見ら
れるような佛典の組織的な編纂という大事業が、ブトンの手によって大成せられた。オバーミラー（*E. Obermiller*）
によるブトン佛教史の英訳の序において、オバーミラーの師スチエルバックキー（*Scherbatsky*）の記述するところ
によると、“その最後の形態が、四五〇〇部からなる佛典の大集成である現在のチベット大蔵經を、組織的に編纂す
る資格のある学僧は、ブトンを描いて他にはない”という。そこにいわゆるブトンの佛教史とは、当時チベットにお
いてすでに翻訳せられ保持せられてあった全佛典の組織的体系的な概観を行なうに当って、先ず叙述せられたインド
及びチベットの佛教史なのである。そしてその歴史的叙述に続いて、ブトンは、チベットに保持せられてあった佛典
と、それぞれの佛典の著者のあるものは著者と、翻訳者と、を誌した目録を出している。それで、ブトンのそういう

著作によって、チベット大蔵経の源の形態がブトンによって編集せられたということになるのである。尤もそこに、どれだけの部数が包蔵せられているか。現在われわれの手許にコロタイプ版で与えられている東洋文庫所蔵のブトン佛教史及びそれに引続いて誌されている佛典目録の部分は、そのコロタイプ版の版面が著しく不明瞭であるために、未だその佛典の部数が明瞭に算え上げられるに至っていない。⁽¹⁰⁾

(三) チベット大蔵経におけるインド佛教的性格

以上は、どのような歴史的事情を経てチベット大蔵経が形成せられるに至ったかを略述したものである。そこに見られる如く、チベットは、唐の太宗の王女文成公主を迎え、それによって、中国からも、佛像、佛典、僧侶の渡来があった事情から見ても、中国佛教との交渉も深かった筈である。にもかかわらず、チベット大蔵経には、インドから佛教が次々と伝来して、インドからの佛典の翻訳が主流をなしているという跡が顕著である。シルヴァン・レヴィ教授⁽¹¹⁾のヒューマニズム・ブディクにも、そういう点が強調せられている。そこで、チベット大蔵経においてインド佛教が主流をなしているという事由について、学界で注意せられている重要な一、二の点について述べる。

(1) 佛典チベット語・Classical Tibetan の性格。第一は、佛典チベット語としての古典チベット語 (Classical Tibetan) の性格についてである。先に述べたように、サンスクリット語佛典が翻訳せられるに当って、サンスクリット語佛典が透写されるような構成をもつ古典チベット語が制定せられ、その古典チベット語によってサンスクリット語佛典が訳せられたといわれる、その古典チベット語についてである。

さて、チベット語佛典が近代の西ヨーロッパの学界で本格的に取り上げられたのは、一八〇〇年代の初めを過ぎた頃からである。その中で純粹に語学的な業績だけという、それは一八三四年にハンガリヤ人チョーマ・ド・ケーラス (Alexander Csoma de Kőrös) が「チベット語文典 (A Grammar of the Tibetan Language, Calcutta, 1834)

と、藏英辞典 (Tibetan and English Dictionary, Calcutta, 1834) とを刊行し、五年後一八三九年に、シュミッド (T. J. Schmidt) が、聖ペテルスブル (Saint Petersburg) で、チョーマのチベット語文典を基礎にしたような文典を、そして一八四一年に、藏独辞典 (Tibetisch Deutsches Wörterbuch) を刊行したのが注目せられる。然るにその同じ頃、フランス東洋学界は、E・ビュルヌフ (E. Burnouf) による佛教学の業績の輝やかしいものがあり、その学流では、大乘佛敎のサンスクリット語原典と、その漢訳及びチベット訳本との比較研究という文献学的研究の方法が課せられることになっている。⁽¹²⁾ そこでその学流の中で、サンスクリット語佛典とチベット語訳佛典の研究に携わっていたフォーコー (Édward Foucaux) は、一八五八年にチベット語文典 (La Grammaire de la Langue Tibétaine, Paris) を刊行し、そこでは、チベット語に対するサンスクリット語からの影響のあることが深く考慮された。フォーコーは、チベット語訳佛典にあつては、そのサンスクリット語原本への考慮なくしては、その理解が不可能に近いものであることを文典の序で注意した。次いで、今世紀の初頭にあつて、コルディエ (Palmyr Cordier)⁽¹³⁾ が、古典チベット語の講義 (Cours du Tibétain Classique) を綴ったことであるが、まさに古典チベット語の文典書と取り組んで、その文典形態を解明したものは、バコー (Jaques Bacot) で、彼の Les Slokas Grammaticaux de Thonmi Samboja, une Grammaire Tibétaine du Tibétain Classique (Paris, 1928) は、チベット学者バコーの生涯の業績が、そこに凝結せられていると見る事ができる。この書は、七世紀前半に、ソンツェンガムボ王が、ネパールと唐とから王妃を迎えて佛敎をチベットへ受け容れようとし、そのためには、サンスクリット語佛典のチベット語訳を作し遂げねばならぬ処から、トンミ・サンボータ (Thonmi Samboja) をインドへ派遣し、トンミはインドでサンスクリット語佛典を学び、それを基礎にして佛典の翻訳のための古典チベット語文典を制定した。そういうトンミの文典書、——それは、メトリカル (metrical) な文体で書かれているものであるが——そういう經典の如き文典書を、バコーは一八世紀にチベットの文典学者によって書かれたその註釈書 (善巧成就註)⁽¹⁴⁾ によ

って、近代言語学的に解明した。これがバコーの業績である。

更に、バコーは、古典チベット語文法二巻 (Grammaire du Tibétain Classique, 2 vols, Paris, 1946~1948) を刊行し、先の業績に基づいて古典チベット語文典を、一般に依用できるように叙述した。そしてバコーの後継者ラルー (Marcelle Lalou) は、また実用文典書として初級古典チベット語綱要 (Manuel Élémentaire de Tibétain Classique, Paris, 1950) を刊行した。何れもトンミ・サンポータから始まる古典文法学に基づいて、近代言語学的な面から編述せられたもので、以前のチョー・マ以来のチベット文法書類と全く趣を異にしたものである。

それらの業績から指示せられるところとして、チベット語訳佛典の形態について、こういうことを概畧することができるようになった。すなわち、古典チベット語によってサンスクリット語佛典が翻訳せられていったとき、普通ならば、時間というものが自然に語彙や文法を作るものであるのに、そういう時間的な余裕がなかったために、人工的に語彙を制定して artificial language を造りあげ、サンスクリット文の上に古典チベット語を貼りつけるように直訳して行った。古典チベット語の語彙や文章は、サンスクリット語の透写的な態であるということができる。そういう古典チベット語であるからサンスクリット語の影響が著しく加わっているので、古典チベット語はサンスクリット語との照応なくしては能く理解せられない、ということである。

それらの業績によって、先に E・フーコーが目標としていた点が約一世紀を経て明確に証明されるようになった。尤もバコーも、サンスクリット語との照応の仕方なくして古典チベット語の理解のできないことを注意したのではあったが、バコーの文典にも、その後継者ラルーの文典の上にも、そのことは委細には実証せられていなかった。その点を特に委細に記述しようとしたものが、稲葉正就著「チベット語古典文法学」(法蔵館、昭和二九年)である。稲葉氏の古典文法学においては、古典文法資料によって古典チベット語の独自の文法を組み立てつつ、それに並行して、或いはサンスクリット語による影響を説き、或いは随処にサンスクリット語と比較して發達した古典チベット語の形

態を論述している。いわばチベット語古典文学という建物に、更にチベット語のサンスクリット語的な発達という鉄骨が入っていることになる。稲葉氏の業績は、現代の西欧におけるチベット研究のセンターであるローマのイズメオ(Is. M. E. O)のテッチ(Giuseppe Tucci)教授の認めるところであり、一九五五年六月の“East and West”誌に三頁六欄に亘ってモリチニ(Giuseppe Morichini)氏によって詳細に紹介されたのであった。そして、テッチ教授所蔵の古典チベット文法に関するすべての資料は、稲葉氏に委譲せられて、稲葉氏は目下その研究仕上げに専心している。

そういう古典チベット語によって、サンスクリット語佛典が訳せられていったので、チベット語訳佛典は、漢訳佛典が厳密な意味での翻訳佛典であるのに対して、サンスクリットの、原典的である。京都大学の長尾雅人教授は、大平洋戦争の頃、蒙古のラマ教事情を視察して、「蒙古⁽¹⁵⁾学問寺」という蒙古ラマ教に関するきわめて学問的な調査報告を出版し、ラマ教僧院においての佛教学習のされ方が全くインド的であることを論述されたが、そのようにチベット佛教がインド的であるということは、そこに用いられているチベット語訳佛典がインド的であり、サンスクリットのであるということである。

(2)第二は、チベット佛教が主としてインド佛教を受容するに至った契機としての一つの歴史上の事件についてである。上述の如く、チベット大蔵経は、インド佛教的な性格において成就されていった。尤も佛教がチベットへ公的に移入せられたのは、先述の如く、唐の太宗の王女文成公主とネパールの王女バーモキツンとの、チベットへの入室を契機としたのであるから、チベットの佛教には中国佛教的な要素も相当導入せられてあって然るべきであった。然るにネパールの王女によって齎らされたインド佛教が主な潮流として行われていったということについては、その間に歴史上の一つの注目すべき事件を経過したのであった。それはブトンの佛教史を始め、チベットの史書に伝承せられるラッサ(Lha sa)の宗論といわれるもので、先にも一言したチソンデツェン(754~794)王の治世中の出来事で

ある。それを概略すると、チソンデツェン王の治世中、中国から招いた頓門派(禪宗)のマハーヤーナ(Mahayana・摩訶衍)という禅僧の宗義がチベットに流行して民衆をまどわしたが、その時、インドから漸門派のカマラシーラ(Kamalasila・蓮華戒)が招かれて、チソンデツェン王の前で、禅宗のマハーヤーナ和尚と宗論を戦わせてマハーヤーナを敗北せしめ、以後のチベット佛教の性格を決定したという事件である。

従来、この事件は、記述の上に多分の潤色の跡のある処から、単なる伝説とみなされ、史実と遠いものとして、信じられなかったのであったが、Paul Demiéville: *Le Concile de Lhasa, une controverse sur le quietisme entre bouddhistes de l'Inde et de la Chine au VIII^e siècle de l'ère chrétienne* (Paris, 1952) に於いて Paul Pelliot が敦煌から将来した文献の中に、頓悟大乘正理決という一書を発見し、その文献が、その宗論の漢文記録である事実を紹介することによって、その宗論の史実でありうる事が確証されることになった。尤もそのドミエヴィル教授の業績に関しては、京都大学の人文科学研究所の東方学報第三五冊(昭和三九年)に掲載せられた上山大峻「曇曠と敦煌の佛教学」の中で、上山氏によって、「その史実に関するテュッチ教授によるチベット資料の文献学的研究などを参照し、正理決本文を更に仔細に審議せられた」ような点もあるが、結局、その事件の実情を適確にいうと、チソンデツェン王の治世の七八〇～七八二年頃に、ラッサにおいて禅宗の頓門派の人たちとインドの漸門派の人たちが、夫々、自分たちの教義を叙述し、その場合には中国側の頓門派の禅宗の信者が増加した傾向であったが、インド側は、その劣勢を挽回しようとして、カマラシーラをインドから招き、先に一言したサムエ寺院において御前宗論が行なわれることになった。その場合には、カマラシーラ側の優勢となり、マハーヤーナたちは中国へ追放されて、以後チベット佛教はインド系の佛教に定められたということになる。そしてカマラシーラは王の命令によって修習次第(Bhavana-krama)を著述することになった。それが七九二～七九四年頃の事件である、ということになる。修習次第という書は、現在、チベット大蔵経の中に収められている書(影印版チベット大蔵経第一〇二巻No.

6310~6312) で、先のドミエヴィル教授の著述の中に、ルウヴァーン大学教授ラモート (Étienne Lamotte) 氏のそれに対する記述が掲載せられている。

尤も、その事件が、そのような結果となるに到る迄の間には、彼此政治的な圧力が、その時々において両派の間に利用せられた跡もあるのであるが、とにかくカマラシーラが、その事件の中に迎えられてきたということは、インド佛教側を優位な状態に導く契機であったといえる。そして更にカマラシーラのみならず、先立つ七七五年には、カマラシーラの師であるシャーンタラクシタ (Santarakṣita・寂護) によってサムエ寺院の基礎が定められていることも伝えられるのである。そのように、シャーンタラクシタとカマラシーラの二大学匠が、そこに登場していたということになると、それは歴史家たちが考えている以上に、そこには当時のインド佛教の大きな勢力がそこに注ぎこまれていたものであることを見なければならぬ。それは現在チベット大蔵經に収蔵せられているその二人の学匠の著作は、紀元三世紀に大乘佛教哲学の基礎を立てた竜樹 (Nāgārjuna) の思想を、その時点において再検討し、その論議を拡充しようとしたもので、それはインド大乘佛教哲学の終末を飾る輝かしい業績であることによって知られるからである。⁽¹⁷⁾

(四) チベット佛典の一特異性

以上のような成立事情にあるチベット大蔵經が、佛教研究の上にどういう役割をもっているか、など彼此枚挙すべきこともあるが、ここでは始めから、翻訳されている大蔵經という性格に従って、チベット大蔵經を漢訳佛典と対比して述べてきた関係上、チベット大蔵經の全体を通覧した上での、漢訳大蔵經とは特異な性格がある、という点について終りに一言申し述べる。

漢訳大蔵經という佛典の大集成は、佛教の教義に関するもの他に伝記に関するものなどをも包蔵していることは

勿論であるが、大体において佛教に関するものの大集成ということより他はない。⁽¹⁸⁾ 然るにチベット大蔵経には、佛教プロパーに関するもの（内明）の他に、インドの文法学（声明）、認識論・論理学（因明）、医学（医方明）、技芸学（工巧明）などの五明、すなわち古代及び中世におけるインドを中心とする文化一般に関する研究資料なども収蔵している。そういう点によって学者は、それがチベット大蔵経の特異な性格であるというとし、時あつてそういう点がチベット大蔵経の文化的な価値であるというおとすることすらある。けれども私から言えば、佛教が夫々の時代に処していった歴史的境域の文化を広く包蔵しようとするものが大乘佛教であり、大乘佛教はそういう文化一般を広く包蔵することにおいて、佛教の思想体系を形成しようとするものであるといたい。そのことは、四・五世紀の頃に在世した弥勒—無著—世親という三人の思想家を経て完成せられていった大乘莊嚴経論という書の次の言葉（梵文求法品第六〇偈、功德品第四三偈）によって、よく表示せられている。

大乘佛教者は、五明¹⁹処（*stana; work*）に精勤することなくしては、佛教の究極目的に到達しないと。この言葉は、それ以後の書物の中にも度々引用せられる重要な言葉であるが、それを一般的に敷衍せば、こういうことになる。すなわち、

大乘佛教者は、正覚²⁰の道としての佛教の教説をきわめることに愈々精勤しなければならぬと同時に、彼は、その対処する時代の諸学にも精勤しなければならない。それでなければ佛教の究極目的をきわめることにならない。それがなされずして、ただ正覚の境界に停滞してしまふならば、小乗佛教でしかない。⁽²⁰⁾ これは、大乘の実践というこの意味を明瞭に表示している言葉である。

先に関説した一四世紀に在してチベット大蔵経編纂の基礎を築き上げたブトンは、⁽²¹⁾ その佛教史の中に、大乘莊嚴経論のこの言葉を引用して、チベット大蔵経中に収蔵せられているそれら諸学の書に関説しているのを見るから、佛教以外の諸科学の典籍を大蔵経の中に収蔵せしめたのは、恐らくブトン²¹の大乘佛教理解に基づくものであらう。

中国佛教は、中国の文化がすでに形成せられた境域に伝訳せられたのであるから、中国へ佛典が伝訳せられるような時期には、一般文化に関するようなインドの書物が注意せられなかったのかも知れない。それが、漢訳大蔵経中に、そういう書物が収蔵せられる機会を持たなかった事由かも知れない。しかしチベットは、インド佛教の導入を以って、いわゆる文化国家を形成しようとしたのであるから、先の大乗莊嚴経論に提示せられるような大乗佛教実践の理念が、その儘、大蔵経の中に展開せられようとしたのでないか、と思われる。それは且らく別としても、大乗莊嚴経論に展開せられているような理念において、大乗佛教の実践が考えられていくことは、佛教が大乗佛教として歴史的に実践せられる上から見て重要な事柄でないか、と思われる。

註1 ネフスキー・石浜純太郎「西夏語訳大蔵経考」(龍谷論叢、二八七号)。

2 Sylvain Lévi: *L'Inde et le Monde* (Paris, 1926) 山田龍城訳「佛教人文主義」(東京大雄閣書房、昭和三年)、和訳五一頁及び一二五頁など参照。同、*L'Inde Civilisatrice* (Paris, 1938) 山口益・佐々木教悟共訳註「インド文化史」(平楽寺書店、昭和三年)、和訳二〇二頁参照。因みに直前の文章中に「インド佛教の使節たち」としたのは、*les missionnaires du Bouddhisme indien* (*L'Inde et le Monde*, p. 48) の語を用いたのである。

3 S・レヴィ著「佛教人文主義」五二頁、及び佐藤長著「古代チベット史研究」(東洋史研究会、昭和三年)上巻二七四頁。
4 芳村修基編「デンカル目録」Shiyuki Yoshimura: *The Denkar-ma, an oldest catalogue of the Tibetan Buddhist Canon*, with Introductory notes, Ryukoku University, Kyoto, 1950.

Marcelle Lalou: *Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-ston-lde-bcan*, *Le Journal asiatique*, Paris 1953.

5 佐藤長「レンダルマ王の在位年次について」(史林、一九六三年第五号)。

6 この項の下、ナールンダやヴィクラマシラ僧院が破壊せられ荒廃して、佛教僧侶がチベットへ逃避した事情などのことは、G. Roerich: *Biography of Dharmasvamin* (Patna, 1959) p. 42 に記録されている。

7 稲葉正就「中世チベット初期における般若中観論書の訳出」(大谷大学佛教学会編「仏教学セミナー」、一九六六年)参照。
8 今の蒙古とチベット佛教との関係については、René Grousset: *Histoire de l'extrême Orient* (Paris, 1929) p. 460

以下の「フビライの宗教政策」の記述によるところもあるが、その年次については、稲葉正就「元の帝師に関する研究」（大谷大学研究年報第十七巻）一〇一頁以下による。なおこの所述及びこの項の終りまでのところは、シルヴァン・レヴィ「佛教人文主義」五二～五四頁が要を得た記述である。

- 9 Bu-ston: History of Buddhism, translated by E. Obermiller, with an Introduction by Th. Stcherbatsky, Heidelberg, 1931.

- 10 東洋文庫には、*「ブトンの佛教史」*のチベット原本が四本あるということであるから、それら四本を全部対校するならば、その部数などを確かめうるかもしれない。

- 11 註(8)で閑説した個処。

- 12 拙著「フランス佛教学の五十年」（平楽寺書店、一九五四）六～一五頁。

- 13 拙稿「フランスにおける、初期の佛教チベット学をめぐって」（関西大学東西学術研究所彙報第四、昭和二九年）一二頁。

- 14 稲葉正就著「チベット語古典文法学」（法蔵館、昭和二九年）四二頁に、その註釈書の著者が、善巧成就 (Mkhas grub) であるという。バコーのトンミ文法研究書の序論の初めに、善巧成就はシツ (Situ) の弟子で、シツが十七世紀の人であるというから、善巧成就も十七世紀か十八世紀の人であろう。

- 15 長尾雅人著「蒙古学問寺」（全国書房、昭和二二年）。

- 16 拙稿「中観莊嚴論の解説序説」（干潟博士古稀記念論文集、昭和三九年）五一頁。

- 17 前註所掲の拙論四四頁、並びに拙著「般若思想史」（法蔵館、昭和二六年）一九三～一九四頁。

- 18 この点について私は、汎く漢訳大藏經を渉獵して、特に中国佛教々理の研究に専心する学友の所見を確かめた。

- 19 この言葉は、文字通りには「最上聖者は、五種の明処に精勤を作さずしては、如何にするも一切智たるには至らない」である。宇井伯寿著「大乘莊嚴經論研究」二三五頁参照。

- 20 この言葉の精細適確な意味については、山口益等著「佛教学序説」（平楽寺書店）一九六頁の解釈を参照せられたい。

- 21 先に註(9)の個処で閑説した「ブトンの佛教史」I、四四～四八頁参照。

（本稿は、昭和四二年五月二二日、日本学士院例会の「論文提出」において演べられたものに、若干の補訂を施したものである。）